swear heart ～誓う心～

LULA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｗｅａｒ　ｈｅａｒｔ　～誓う心～

【Ｎコード】
Ｎ６３５３Ｂ

【作者名】
ＬＵＬＡ

【あらすじ】
盗賊ジュンリは孤独だった。人を愛しもせず、愛されもせず…。
そんなジュンリの初めての恋。しかし、それは決して叶わない恋だった…。

―プロローグ―

俺は、生まれた時から盗賊になる運命だった。有名な盗賊に育てられた、それだけの理由で。
いつも孤独に生きていた。愛する人さえいなかった。
今までそのことを恨んだことはなかった。
“あなた”に会うまでは―――

「お前は大きくなったら立派な盗賊になるんだ」
小さい頃はイヤというほど聞かされた言葉。
でも、その言葉があったから、俺はここにいるんだ。
ふいに静かな廊下に響く足音。次の瞬間。
「盗賊ジュンリ、参上！」
静かな会議室に響く声。皆、声をなくしている。
「どうした。俺が恐いのか。そうか、では、予告状通り設計図を力ずくでもいただいていく！」
「いや、予告状など送られてないぞ！」
責任者らしき男が指摘する。すると、男の口元がゆがんだ。
「この俺に口答えするなど、いい度胸だな。」
そして男の右手に握られているのは、長い剣。
「皆まとめて、殺ス！」
ほどなく。先ほど会議室に入ったときとは正反対のいかにもサラリーマン風の背広を着た男が会社から出て行った。
その男の名は、ジュンリ・ドラゴン。
有名な盗賊、タグ・ドラゴンの息子だ。
男、といってもまだ１９歳。そんなジュンリは友達や恋人とは無縁。
常に孤独だ。

そして、ジュンリが忍び込んだ会社とは、
「ｍｏｒｎ・ｈｅａｒｔ」。
世界的に有名なＩＴ企業だ。
その会議には会社の社長、ダニエル・ティンバーも出席していた。
来月にもキャッチコピーモデルとして公の場に姿を現すであろうと噂されていた娘の名が、
リュヌ・ティンバー。
この娘が、ジュンリの歯車を大きく狂わせるなど、誰も思わなかっただろう。

第１章

「ふ。所詮社長なんて形だけなもんなんだよ。くっだらねえ。」
ジュンリは見ていたテレビを消した。丁度ニュースでどこかの社長にインタビューをしていたのだ。
「いやあ、でも今日の殴りこみはつまんなかったなあ。もっと手ごたえありかと思ったんだけど。」
ここはジュンリの家。といっても山奥に存在する。内装はいたってシンプル。ベッドとテレビ、棚があるのみである。
「何か食うか。腹が減った。」
その時。
コンコン、コンコン。
何年ぶりかのノックの音が聞こえた。
「はい、誰ですか？」
「私です！リュヌ・ティンバー。」
しばらくジュンリが記憶を辿っていると、
「入りますよ？」
との声。しかし鍵がかかっているため中には入れない。
「リュヌ・ティンバー？？あ、こないだの社長の娘か。何の用だよ。なんでそんなお嬢様がこんな山奥に？あ、道にでも迷ったのか？」
天然ボケをかますジュンリ。そして鍵を開ける。全く無防備な格好

であり、いつもの剣でさえしまってある。そう、全くの油断状態である。
「最低！」
「は？」
「最低っていってるのよ！この冷血人間！」
「・・・ええっと・・・。（耳が痛い・・・）」
武器ではないが、声の攻撃にあってしまった。しかもとてつもなく怒っているため、何を言っているのかもほとんど分からない。
「何を言っているかよく分から・・・」
「だから！冷血人間っていってるのよ！この最低男！」
「はあ？だから何がつってんだよこっちは！」
「最低！」
「それだけじゃ分からないつってんだけどなあ・・・。」
頬をかきながら小声で呟くジュンリ。男性だったらとっくに殺されている。ジュンリは無意味に女性を攻撃しないのだ。しかも女性慣れしていない。気が強いリュヌの受け答えが全くといっていいほど出来ていない。
「なんで私の父を殺すの？！信じられない！昔、あんたの父親に私の母も殺されたのよ！なんか恨みでもあるの？！」
少し落ち着いたリュヌが、ジュンリを問い詰める。
ジュンリは、少し考えてから
「確かに、オレの生き方は間違っているかもしれない。罪のない人間も殺すし、その後の罪悪感を持ったこともない。でも、言い訳にならないと思うけど、親のすることが今のオレになってしまっているんだ。リュヌ、分かってくれ。これがオレの生き方なんだ。」
「・・・・・・。なんで、なんで『モノ』奪うだけの目的で人を殺さなきゃいけないの？」
絞るように喋るリュヌ。その大きな目には涙が浮かんでいる。
その目を見たジュンリも、唇をかみしめ、足元を見つめる。
そして、小さな声でつぶやいた。

「オレ、盗賊やめるよ。自分が情けねえよ。人の悲しみも分かんないで『モノ』を奪う目的で人を殺してきた。オレ、生きてないほうがいいのかな。」
両手を握り締め、零れ落ちる涙をぬぐおうともせずに目を閉じている。
いつもの「盗賊」ジュンリからは想像もできない弱さを見せていた。
リュヌは、そんなジュンリを意外そうに、でも、どこか哀しさをもって見つめている。
そして、どれだけ待っただろう。
暮れかけていた日もすっかり消え、空には一寸の欠けもない満月が浮かんでいる。
リュヌが、独り言のように囁いた。
「あなたは、死ぬ必要はないと思う。でも、私や、今まで家族や恋人を失った人への償いで、もっと遠くに行ってほしい。もちろん、あなたの生き方だから、私が命令することはできない。でも、私達に罪悪感を持っているなら・・・。」
リュヌの言葉は途中で止まり、代わりに小さな嗚咽が漏れてきた。
ずっとうつむいていたジュンリが、リュヌの肩にそっと手を触れ、語るように喋る。
「分かった。どこか、旅にでるよ。それが、リュヌのためになるなら、オレはそれでもいい。もう、人は絶対殺さないから・・・。」
どれくらい経っただろう。
雲がなかった夜空に雲がかかりはじめ、満月が消えかかったとき。
ずっと黙っていたリュヌが言った。今度は普通の声で。
「もう帰るわ。ずっといてもしょうがないから。明日も来るけど、その時にはここにはいないで。もしもここにまだいたら、私はあなたを殺すわ。」
言い残すと、ドアを開け、外に出て行った。
ジュンリは、ずっとソファーに座ったままだった。

第2章

次の日の朝早く。
まだ十分に日も昇ってない頃に、ジュンリは家を出ていた。
向かう先は決めていない。足の向くままに歩いていく。
気がつくと、どこかも分からない森にいた。
ジュンリの手足は傷だらけだった。
無理もない。木々の生い茂る森にいて、服装はタンクトップ一枚。
　しかし、ジュンリは痛みを感じていない。
それよりも自分への憤り、そしてリュヌへの罪悪感が自分を襲っている。
ジュンリはそれまで殺した人間の親族に罪悪感など持ったことがなかった。
　「モノ」がほしかったら守っている者も巻き込み、殺せ。
そう教えられてきた。そのことを守り、生きてきた。
そのことに疑問を思ったことなど一度もなかった。それなのに。
たった一夜であんなにも心が動いてしまうなんて。
ジュンリは自分が信じられなかったのだ。
人を殺し、それが一生の自分の役目、やらなければいけないことだと思って一度も自分の意思で動いたことがなかった。
ジュンリが「父親」と呼んでいる人は、本当の父親ではない。
　ジュンリの本当の生まれ故郷は北国、アイルランド。
生まれた家は元々は裕福だった。
しかし、ジュンリが生まれる直前に会社が破産。
ジュンリ一人を育てる余裕もなくなっていた。
そこで引き取った人間が、ジュンリの育ての父親「タグ」。
　その頃はまだ近辺の国でしか名前を知られていなかった為、何のためらいもなくジュンリを受け渡してしまったのだ。
　それから、今の盗賊ジュンリが出来上がることになったのだ。
もし、会社が破産していなかったら、ジュンリはまともな人生を歩んでいたことだろう。

ジュンリは、生みの親を恨んでいた。自分を他の人へと渡してしまった親を。
今では仕方がないと思えるが。
そのように盗賊の親に育てられたジュンリは小さい頃からタグについて盗賊修行。
友達などいない。周りの人間はタグのみだった。
「・・・・・・。」
急に足を押さえ、うずくまるジュンリ。その表情は苦しそうだ。
そのときだった。
「本当に、バカな人。私がいなかったらどうなっていたと思う？」
昨日の夜に聞いたばかりの凛とした声。
リュヌだった。
長い手足を包むような深紅の服。
手には包帯を持っている。
ジュンリの足元にしゃがみこむと、あっという間に応急処置をしてしまった。
そして、一つため息をつき、ジュンリに言う。
「やっぱり一人じゃ無理ね。心配してついてきた甲斐があったわ。
なんで剣一本も持ってきてないの？」
そして、いつの間に持っていたのか、いつもジュンリが使っていた剣を差し出す。
　驚きながらもジュンリは剣を受け取り、何気なく振ってみる。
「危ないわよっ！」
叫ぶリュヌ。もちろん、剣など触ったこともないだろう。
　ジュンリは少しうろたえた様子で
「あ、えっと、その、ごめん・・・。」
と目をそらしながらつぶやく。
　リュヌは軽く空を仰ぎ、そのまま
「あなたについていく。もうたぶん家には戻れないもの。」
これにはさすがのジュンリも声をなくす。

まさかお嬢様のリュヌが、親を殺した張本人ジュンリについていくとは思わなかったからだ。
　しかも、今から行く道は山道である。
どんなところでも寝れるジュンリはともかく、リュヌは野宿などできないだろう。
「もう家には戻れないって？」
ただただ道が分からないのかと思ったが表情を見るとそうではなさそうだ。
するとリュヌは唇をかみ締め、
「家出したのよ。昨日、義理の母と喧嘩して。元々仲悪かったし、お父さんが死んだことで家にいる必要もなかったのよ。しかも今度他の会社に買収されるらしいの。もういやなの。今日は取材が来る、来客があるからこの服を着ろ、学校の規則もそう。規則なんていやだったの。自由に生きたかった。そうしたらテレビであなたのことを知ったの。『盗賊ジュンリ』って。正直言うと、すごく憧れてたの。自由に生きているあなたが。でも、恨みもしてた。なんで私は規則だらけの生活、あの人は自由に生きているんだろうって。」
そこまで喋ると、ジュンリの目をじっと見つめ、
「いいでしょ？連れて行って。どこにでもいいわ。もっと、遠くへ。」
ジュンリはつい、答えてしまった。
「ああ、分かった。」
と――。
このときに何気なく言ってしまったこの言葉が、ジュンリとリュヌの、盗賊とその的になった会社の娘という関係があわれに崩れ去ってしまうのだった・・・。

第3章

　森を抜け、ここは荒れ果てた街。
廃ビルが並び、浮浪者がさまよっている。

ジュンリがわずかな報酬を得るためやってくる街だ。
　浮浪者の一人が言った。
「今日はどうしたんだ。彼女も一緒か？」
怪しい笑みを浮かべる浮浪者にリュヌがおびえた表情を見せる。
ジュンリは浮浪者の目を睨み、冷たく言い放つ。
「もうお前には関係ない。これ以上はなしかけたら斬るぞ。」
長剣に手をかけると浮浪者は怯えたように逃げていった。
「ここにいるのは危ないかもしれない。」
そうつぶやくとジュンリの背中に隠れていたリュヌが聞いてくる。
「ここって、、、どこ？」
ジュンリはリュヌのほうを見もせずに
「お前には関係ないところだ。お嬢様のお前にはな。本当にその肩書きを取るのなら教えてやってもいいが？」
　リュヌは一瞬ジュンリの冷たい言葉に驚いたようだが、すぐにジュンリを睨みつけ、
言い放った。
「そう言ったはずだけど。記憶力のない人ね。」
ジュンリはその言葉に小さく舌打ちをし、ため息まじりに言った。
「ロンリー・トゥーヴィ。お前も知ってるだろ、俗称ウルフ。」
ロンリー・トゥーヴィ。５０年以上前は世界で５本の指に入るほど栄えていた町だ。
　しかし５０年前、暴走族、暴力団などのたまり場となり、今では浮浪者の町となっている。
そのとき、リュヌの表情が一瞬固まったようにジュンリは思った。
　遠くで鐘の音が鳴っている。
道に座り込んでいた人々があわてて家の中に入っていく。
すると、遠くから馬の大群がやってきた。
ジュンリ達に近づくにつれ、その影ははっきりとし、そして馬に乗っている人々がジュンリがもっとも嫌う貴族だということが分かった。

ジュンリは顔をしかめ、リュヌに問いかけた。
「お前の何かか？お嬢様のお迎えってか。」
リュヌはその一言が嫌だったらしく、小さく短いため息をついて
「知らないわ。あんな人たち。どうせお貴族様々でしょ？」
お貴族様々。それはウルフのような町独特の偉い人の俗称。
　偉くって威張っていて、ジュンリのような盗賊や海賊、世間から見放された人々が使う言葉だ。
　決してリュヌのようなお嬢様が使う言葉ではない。
第六感が冴えているジュンリは不審に思いリュヌにたずねる。
「お前、本当にリュヌか？」
するとリュヌの表情が一瞬固まった。
しかし次の瞬間、
「やっぱり最低ね！私はリュヌよ！そんなことも分からないの？もういいわ、さよなら！」
それだけ言い放つとリュヌは来た道を走り去っていってしまった。
「ちょ、リュヌ！」
追いかけようとして走り出そうとしたジュンリの目の前に銀色の剣先。
頭上から声がした。
「お前は誰だ、名を名乗れ。」
機械のような無機質の声。
上を見上げるとそこには馬に乗った男だ。
ジュンリは見たことがある。ｍｏｒｎ・ｈｅａｒｔの副社長、ハインだ。
「オレはジュンリ。盗賊ジュンリ様だ。」
「自分に様をつけるなど自信たっぷりのようだな。それではいざ勝負！」
馬から飛び降りたハイン。
　少しも身の危険を感じていない様子のジュンリ。
とるにたらない相手だと思っているのだろう。

剣の柄に手を軽くかけ、冷たく微笑んでいる。
　その微笑みに怒りを覚えたのだろう、ハインが剣を構え、
「どっちが先に相手を斬れるか、真剣勝負だ！」
と言うなりジュンリに斬りかかってきた。
　ジュンリが剣を引き抜いたとき。
勝負は決まっていた。
　ドサッと倒れた男。ハインだった。
しかし、ハインの体には傷がついていなかった。
ジュンリは人を傷つけることなく、剣の波動だけで殺したのだ。
　その威力に恐れをなしたのだろう、ハインの後ろにいた者たちも慌てて逃げていった。
一匹だけ残ったハインの馬にそっと手を触れるジュンリ。
手が触れた瞬間、警戒していた馬の表情がやわらいだ。
　馬にまたがるジュンリ。
ウルフの町の喧騒を残し、ジュンリと馬は去っていくのだった。

第４章

「また一人、殺しちまった・・・。」
草原の真ん中で青空を見上げながらジュンリがつぶやく。
となりで馬が幸せそうに草を食べている。
ジュンリはそんな馬を見て目を細め、微笑む。
「お前も、大変だったんだよな、色々と。ゆっくりしていいからな。」
とてつもなく幸せな時間だった。
でも、ジュンリの心の奥には色々とわだかまりが残っていた。
リュヌと約束したこと。
「もう人は絶対殺さない」
それを破ってしまったことだ。
そして、森であったリュヌは偽者なのか、本物なのか。
空は晴れているのに、ジュンリには曇った空に見えた。

いつのまにかジュンリは眠っていたようだ。
気づくと明るかった空は夕暮れ時のオレンジ色をしていた。
ふと、気配を感じ瞬間的に起き上がるジュンリ。
普通のものには分からないが、ただならぬ空気を感じ、いつでも立ち上がれるように膝立ちのまま耳をすますジュンリ。
遥か遠くから聞こえてくる鳥の声。
「なんだ、鳥か…。」
警戒を解かないまま、目を閉じると、人の足音がハッキリと聞こえた。
音がするほうを見ると、そこにはリュヌがいた。
「ジュンリ…？」
少し弱々しいリュヌの声。
あの夜に聞いた声とは少し違うような、優しい声だった。
さっき会っていたリュヌは偽者だったのか。
疑いは確信へと変わった。
ジュンリはゆっくりと立ち上がると口を開いた。
「リュヌ…。なんでここにいるんだ？」
信じられなかった。
また偽者ではないか、新たな疑いがジュンリの心を包む。
あのときよりずっと痩せているリュヌが細い声で答えた。
「あなたに会いたくて…。無事でいるかどうか不安だったの…。よかった、無事で。もう、思い残すことはないわ。それじゃ、さようなら。」
「リュヌ？！お前、何言ってん…」
ジュンリは最後までいえなかった。
だんだんとリュヌの影が薄くなっていったからである。
最後にかすかなきらめきを残し、消えるリュヌ。
「えっ…。なんだよ、今の…。」
ジュンリが動揺していると、馬の足音がした。
ハッと振り向くとそこにいたのは、一人の若い男だった。

「ジュンリ様、ですね。伝言があるのですが。私は、リュヌ・ティンバー様の付き添いのものです。」
まさか。
いやな予感がジュンリの心を突く。
「リュヌ様が、先ほど、ご病気でお亡くなりになられました。」
人が死ぬのには慣れている。
どうせ、殺す人間だったんだ。
人間はいつかは死ぬんだ。
ジュンリは今まで学んだ人を殺すときに思っていた罪悪感を薄れさせるための言葉を思い出したが、ムダだった。
心から、目に、手に、体中に響き渡る悲しみ。
目から一筋の涙が伝った。
「何でだよっ！オレは、リュヌと約束を守るために、旅に出たのに！何で死ぬんだよ！自分勝手じゃねーかよ！何で、何でだよ…。」
溢れ出てくる涙を拭わずに地面に拳を叩きつけて泣き叫ぶジュンリ。
今まで、こんな感情になったことは初めてだった。
「それでは、私はここで。」
事務的に言い、立ち去るリュヌの付き添いの男。
「やだよ…。もう一度、会いたかったよ…。これからオレ、どうしたらいいんだよ！リュヌがいなかったら今生きてる意味もないだろ！何で…。」
初めて声を出して号泣した。
ジュンリは、リュヌのことをどれだけ愛していたか。
『好き』とも『愛している』とも言わない愛。
決して結ばれない恋だった。
しかし、何故死んでしまうのか。
ジュンリはいつまでも泣いていた――

（後書き）

最後のほうは慌てて書きました（汗）
こんな私の作品を読んでくださってありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6353b/

---

swear heart ～誓う心～

2011年1月13日03時54分発行